

捨て菜畑うぐひすいろに氷りけり 鮎山實

あたたかき日は日短きこと忘れ 後藤比奈夫

珈琲はミルクを拒みきれず冬 山口優夢

氷張る微々たる水も見逃さず 丁野弘

人間は管より成れる日短 川崎展宏

冬あたたか嬰が母の手を食べんとす 池田澄子

壁を流れて薄々と氷りける 堀下翔

日沈む方へ歩いて日短 岸本尚毅

冬ざるるリボンかければ贈り物 波多野爽波

潦かはかんとして凍てにける 五十崎古郷

甘辛き匂ひの路地や暮早し 佐藤郁良

噴水の栓のあらはに冬ざるる 山本非神

叱られて次の間へ出る寒さかな 各務支考

短日や買ひ物かごに土のもの 森賀まり

大石の割目に小石冬ざるる 上田信治

日は西へ傾いてある寒さかな 今井杏太郎

短日やたのみもかけずのむくすり 中村伸郎

古タイヤ燃えてあるなり冬の暮 和田耕三郎

みづうみは真水の寒さ舟を出す 長谷川權

手が冷た頬に当てれば頬冷た 波多野爽波

冬の暮灯さねば世に無きことし 野見山朱鳥

幼しや水をさむがるかげぼふし 小川軽舟

生前も死後もつめたき幕の柄 飯田龍太

おのづから粘土は花器に神無月 生駒大祐

しんしんと寒さがたのし歩みゆく 星野立子

日のおたる石にさはればつめたきよ 正岡子規

犬つるむ出雲は神のふきだまり 夏石番矢

まだ馴れぬこの世の寒さ乳を欲る 鷹羽狩行

終業の冷たき靴へ履きかへる 柏柳明子

矢大臣の顔修繕や神無月 西山泊雲

奏楽寒し苔むすまでぞと打楽器が 赤城さかえ

光年のつめたき昔とどきけり 中塚健太

玉の如き小春日和を授かりし 松本たかし

寒いとき寒いところへ行く切符 加藤静夫

教会のつめたき椅子を拭く仕事 田中裕明

小春日や石を噛みある赤蜻蛉 村上東城

京寒し金閣薪にくべてなほ 中村安伸

冬と云ふ口笛を吹くやうにフユ 川崎展宏

おばちゃんに飴ちゃん貰ふ小春かな 金子敦

水枕ガバリと寒い海がある 西東三鬼

温めるも冷ますも息や日々の冬 岡本眸

小春日の生地の中中に置く餡子 大塚迷路

白金に黄金に枢寒からず 夏目漱石

跳箱の突手一瞬冬が来る 友岡子郷

俗名と戒名睦む小春かな 中村苑子

鯛は美のおこぜは醜の寒さかな 鈴木真砂文

己れを喰ふ冬蟻を曳き蛾があるく 加藤知世子

峠見ゆ十一月のむなしさに 細見綾子

短日の門掃き終へて閉しけり 高濱年尾

こなごなになれど鏡ぞ冬映す 野口の理

立冬や父の枕の重かりき 片山由美子

石の家にぼろんとこつんと冬が来て 高屋窓秋

春待つは妻の帰宅を待つことし 鈴木鷹夫

霜夜子は泣く父母よりはるかなるものを呼び 加藤敬耶

荷の上で押す印鑑も十二月 林昭太郎

春を待つ老の心を老いて知る 後藤比奈夫

ワイパーのけづり寄せたる今朝の霜 依光陽子

山国の虚空日わたる冬至かな 飯田蛇笏

九十の端を忘れ春を待つ 阿部みどり女

冬銀河子が減り子守唄が減り 折勝家輔

冬至までひと日ひと日の日暮かな 草間時彦

春を待つ大きな鳥のとき指揮 西村麒麟

冬銀河かくもしづかに子の宿る 仙田洋子

一月の川 一月の谷の中 飯田龍太

待つと言ふことに馴れつつ春を待つ 高瀬あや

冬銀河歲月をもて測る距離 辻美奈子

一月の一日がもう終るのか 西村麒麟

すぐそこに来てゐる春や春を待つ 上村占魚

まだ土に還らぬものに冬の雨 羽根木椋

厳寒の駅かんたんな時刻表 仲寒蝉

遠き世のごとく春待ち老夫婦 加倉井秋を

冬の雨高速バスの腹を開け 小野あらた

酷寒に死して吹雪に葬らる 相馬蓮子

待春のバターにくぐと削り跡 鈴木牛後

冬空の汚れか玻璃の汚れかと 波多野爽波

三寒の四温を待てる机かな 石川桂郎

砂時計の砂のももいる春を待つ 津川絵理子

神官に自宅ありけり寒の月 宇多喜代子

ああとひて吾を生みしか大寒に 矢島清男

大好きな春を二人で待つつもり 西村麒麟

サイレンを追ふサイレンや冬の月 大西朋

大寒や見舞に行けば死んでをり 高瀬虚子

待春の大階段となりけり 齋藤朝比古

寒星や出した手紙はまだポスト 内田美紗

春来つつあり万感といふ言葉 清水径子

春待つや愚図なをとこを待つごとく 津高里永子

荒星や毛布にくるむサクソフォン 攝津幸彦

春はすぐそこだけとパスワードが違う 福田若之

日脚のぶ土曜の午後の彼女 成瀬正俊

大仏の冬日は山に移りけり 星野立子

春隣吾子の微笑の日日あたらし 篠原梵

かく伸びてしまへば日脚問はずなる 上田五千石

クレヨンの折れて冬日の匂ひかな 倉田有希

待つ春や氷にまじる塵あくた 智月

とけるまで霰のかたちしてをりぬ 辻桃子

土は土に隠れて深し冬日向 三橋敏雄

春待つや萬葉、古今、新古今 久保田万太郎

よく弾む春の霰でありにけり 柘植史子

昼過ぎてやや頼もしき冬日かな 岩田由美

春待つといふ大いなる言葉あり 後藤夜半

霜掃きし箒しばらくして倒る 能村登四郎

どんぐりを拾へば根あり冬日向 蘭草慶子

ひとやさし背に置かれし冬日また

木下夕爾

たはことはみみずにかかせしぐれけり

佐々木六戈

雪の日のそれはちひさなラシャ袂

中岡毅雄

寒夕焼終れりすべて終りしごと

細見綾子

しぐるゝやこれ俳諧の一大事

加藤郁平

雪の海底紅花積り蟹となるや

金子兜太

淋しさの底ぬけて降るみぞれかな

内藤文章

大阪はしぐれてゐたり稻荷ずし

北野平八

産卵のはげしき雪の帝都かな

江里昭彦

コンテナの陸揚げしづか雪催

村越敦

湯ぶねより一とくべたのむ時雨かな

川端茅舎

南無阿彌陀佛南無の高さに雪の墓

石巻太

頬ずりの暗くなりけり雪催

丸田洋渡

初雪をどろにこねたる都かな

水田正秀

電飾の音なき音や夜の雪

北川美美

嘘つきのバス時刻表雪もよひ

丸田余志子

寒晴や釘は一本づつ孤独

奥坂まや

純白で私を避ける雪ばかり

權未知子

木枯の果てはありけり海の音

池西言水

我が雪とおもへばかるし笠の雪

宝井其角

雪しまく中を追ひ来て喜捨申す

市堀玉宗

海に出て木枯帰るところなし

山口雪子

下京や雪積む上の夜の雨

野澤凡兆

クレヨンのぼくりと折れる雪の降る

岡田一実

凧に吹き寄せられし星座かな

利普苑るな

雪も亦怒りに任せ降るらしも

相生垣瓜人

雪国に雪一日がもう終る

山本一步

木枯や胡麻煎れば鍋はじく音

松根東洋城

細雪妻に言葉を待たれをり

石田波郷

窓の雪女体にて湯をあふれしむ

桂信子

木がらしや目刺にのこる海の色

芥川龍之介

山門を掘り出してある深雪かな

清崎敏郎

バスを追ひ雪の角巻翼ひろく

岸田稚魚

化さうな傘かす寺の時雨かな

与謝蕪村

能舞台一步は雪を踏むように

対馬康子

雪降るや何かと嗚呼の明治の詩

高柳克弘

掃きよせて時雨の音を聴く落葉

井上井月

泥に降る雪うつくしや泥になる

小川軽舟

雪に燃ゆ注連にならざる藁の嵩

南うみを

もてあそぶ火のうつくしき時雨かな

日野草城

雪の降る町といふ唄ありし忘れたり

安住敦

降る雪へ蝙蝠傘の闇ひらく

しなだしん

しぐるるや駅に西口東口

安住敦

コーヒーかコーラか雪に缶赤く

岸本尚毅

雪国に花鳥づくしの婚衣裳

筑紫繪井

天地の間にほると時雨かな

高濱虚子

降る雪や明治は遠くなりけり

中村草田男

教科書のをはりの雪の詩なりけり

柳元佑太

小夜時雨上野を虚子の来つつあらん

正岡子規

いくたびも雪の深さを尋ねけり

正岡子規

雪道の汚れはじめて村に入る

山田真砂年

死は何かどまん中なり雪ちらちら

金田咲子

いつ来ても枯野にのこる汽笛の尾

八田木枯

冬の水一枝の影も欺かず

中村草田男

てんでんに温泉に浸かること雪の墓

恩田侑布子

空港の明かりのとどく枯野かな

涼野海音

登りゆく人が丸見え冬の山

抜井諒一

ちちははの深寝おそろし雪の底

阿部静雄

わが影の吹かれて長き枯野かな

夏目漱石

雪嶺のひとたび暮れて顕はるる

森澄雄

雪の上に金魚をこぼすそれが遺書

栗林千津

枯野ゆく棺のわれふと目覚めずや

寺山修司

雪の山遥か他界にあることし

鈴木花葉

天然色映画の雪が実に白し

内藤吐天

なほ遠く往けと枯野の道しるべ

山口速

ライターの火がポポポと滝涸るゝ

秋元不死男

豆腐屋の早寝につもる夜の雪

関成美

観音の微笑枯野の果てにあり

九鬼あきゑ

発電は水こそよけれ山眠る

鷹羽狩行

みちのくの雪深ければ雪女郎

山口青耶

狐火や濡るるがときしんの闇

富安風生

その重さとしてつもなく山眠る

鈴木鷹夫

舌のみは肉の色して雪女郎

松尾隆信

狐火小さし親なし子狐がともし

成瀬櫻桃子

灯の数が家の数なり山眠る

若井新一

土手を外れ枯野の犬となりゆけり

山口誓子

冬景色なり何人で見ても

田中裕明

星空はおほきな時計山眠る

南十二国

一対か一対一か枯野人

鷹羽狩行

ながながと川一筋や雪の原

野澤凡兆

樹皮残る桜の撞木山眠る

滝川直広

わが汽車の汽罐車見えて枯野行く

山口波津女

雨水も赤くさびゆく冬田かな

炭太祇

凍滝のなかはひそひそしてゐたる

宮本佳世乃

おくれ来し一人が見ゆる枯野かな

高濱年尾

電柱の丘へ外れ去る冬田かな

鈴木花葉

仏にも寒九の水をたてまつる

森澄雄

飛行機のずしんと降りる枯野かな

長谷川權

家にあても見ゆる冬田を見に出づる

相生垣瓜人

十二月三十日の氷かな

今井杏太郎

遠山に日の当りたる枯野かな

高濱虚子

何もなき冬田へだてゝ村と村

赤星水竹居

すぐ氷る木賊の前のうすき水

宇佐美魚目

落ちてゐる紙に文字ある枯野かな

杉本孝

冬の浪炎の如く立ち上り

上野泰

はや出来て小さき氷柱や暮るゝ軒

高濱年尾

襖絵の鶴相寄りて枯野閉づ

橋本栄治

日時計は銅の塊り冬の湾

今井聖

熱燗や討入りおりた者同士

川崎展宏

胃薬に枯野のにほひありにけり

池田瑠那

冬河に新聞全紙浸り浮く

山口誓子

熱燗の夫にも捨てし夢あらむ

西村和子



白息のあたたかかりし昔かな 今井杏太郎

ガラス戸の遠き夜火事に触れにけり 村上朝彦

着膨れてなんだかめんどりの気分 正木ゆう子

モノリザはまつ白な息吐きさうな 大木あまり

そのみづのどこへもゆかぬ火事の跡 大塚凱

すれ違ふ蛍光色に着ぶくれて 杉山久子

泣きしあとわが白息の豊かなる 橋本多佳子

姿見の火事を映して火事の中 山田露結

着ぶくれて抱けとばかりに諸手あげ 西村和子

献血をしてをりますと息白く 依光陽子

門柱に朝刊置かれ火事終る 皆吉司

着ぶくれてしまへば老の天下なり 石塚直子

水よりも泥光りをり池普請 小环健水

迷惑をかけまいと呑む風邪薬 岡本眸

着ぶくれて津軽の人になりすまし 大牧広

埋火やつひには煮ゆる鍋の物 与謝蕪村

店の灯の明るさに買ふ風邪薬 日野草城

着ぶくれて津軽の人になりすまし 高木晴子

飲めるだけのめたるころのおでんかな 久保田万太郎

早寝してなほりしほどの風邪なりし 稲畑汀子

うすめても花の匂ひの葛湯かな 渡辺水巴

おでん汁冷めて浮かべる油かな 杉原祐之

不機嫌といふにあらねど風邪心地 上村占魚

あはあはと吹けば片寄る葛湯かな 大野林火

提灯の三つに一字づつおでん 下田眞花

風邪ひいてどこか安心してゐたり 岡崎陽市

紐ながき換気扇なり薬喰 中原道夫

外套を着せらるる手をうしろにす 池田秀水

気に入りのおもちゃ召し寄せ風邪の床 西村和子

下しても煮えたつ鍋や薬喰 下村梅子

外套の大きがあはれ警備員 小池康生

まだ水の重みの紙を漉き重ね 今瀬剛一

港で編む毛系統きは故郷で編む 大串章

外套を脱げば一家のお母さん 八木志栄

乾鮭は魚の枯木と申すべく 正岡子規

があと鳴る毛糸編み機や冬の雨 上田信治

棚に置きて帯占め直す懐炉かな 内藤囃言

猟銃を鹿は静かに見据えけり 櫻未知子

毛糸玉とはもう言へぬ平たさよ 青本瑞季

今思へば皆遠火事のごとくなり 能村登四郎

縫へと言ふ猟犬の腹裂けたるを 谷口智行

毛皮着て東京タワーより寂し 小久保佳世子

赤き火事咲笑せしが今日黒し 西東三鬼

猟犬のはじめうるうるしてをりぬ 石田郷子

うたたねの夢美しやおきこたつ 久保より江

遠火事の百年燃えてゐることし 望月周

百貨店めぐる着ぶくれ一家族 草間時彦

牛乳やこたつで過ごす日曜日 山下つばき

消防車しづく垂らして帰りをり 西原天気

着ぶくれてお座りの子のすぐ傾ぎ 鶴岡加苗

本箱に手の届かざる炬燵かな 会津八一

絨毯は空を飛ばねど妻を乗す 中原道夫

焚火跡踏むや空気のはふと出づ 松野苑子

日向ぼこ笑ひくづれて散りにけり 高安風生

絨毯を深々と刺すハイヒール 竹岡一郎

拾得は焚き寒山は掃く落葉 芥川龍之介

日向ぼこしてはをらぬかしてをりぬ 京極柁陽

顔の幅に障子を開けて問ひにけり 高倉和子

焚火中身を爆ぜ終るものあり 野澤節子

日向ぼこ呼ばれて去ればそれきりに 中村汀女

シヨール掛けてくださるように死は多分 池田澄子

竹馬やいろはにはほへとちりぢりに 久保田万太郎

日向ぼこ貯金たつぷりあるごとく 加藤静夫

走り出しすぐ消灯にスキーバス 岡田由季

足袋つぐやノラともならず教師妻 杉田久女

日向ぼこ歯型のついてゐる絵本 西山ゆりこ

咳の子のなぞなぞあそびきりもなや 中村汀女

夢よりは先へさめたる湯婆哉 横井也右

ゆけむりの二階の窓に日向ぼこ 倉田純文

雑炊の卵の黄身の濃きところ 澤田和弥

ゆたんぼのぶりきのなみのあはれかな 小澤實

冬籠足らぬがままに足るままに 上野泰

ストーブの音が吹雪に似てきたる 黒岩徳将

寂寞と湯婆に足をそろへけり 渡辺水巴

兵糧のごとくに書あり冬籠 後藤比奈夫

セーターの黒い弾力親不孝 中嶋秀子

信心はさめることなき湯婆かな 増田龍雨

栄えたるころの金庫や冬館 安部元氣

セーターをくぐる両手が宙を突く 大高翔

手袋をとりたての手の暖かく 星野立子

風呂吹にとろりと味噌の流れけり 松瀬青々

セーターのあつたかさうな予報官 西原天氣

細長く皮手袋をしまひけり 今橋眞理子

大楯をかへせば裏は一面火 高野素十

網焼の腹やはらかくあたたかく 関根千方

手袋の指でフレミングの法則 佐川墨子

鍋底に猪のあぶらの薄茶色 島田牙城

一生を焚火の番をしてゐたき 辻桃子

褌袍着てなんや子分のゐる心地 大住日呂姿

マスクして家事手伝と記入せり 麻まどか

焚火離る誰にともなく会釈して 鈴木慶夫

煮凝や夜は身近なる汽車の音 岩淵喜代子

女教師が水漬すする皆笑ふ 楠節子

焚火かなし消えんとすれば育てられ 高濱虚子

ねんねこの中で歌ふを母のみ知る 千原敷子

水漬を拭かれこどもや話止めず 榮猿丸

とつぷりと後ろ暮れぬし焚火かな 松本たかし

畳まれてひたと吸ひつく屏風かな 長谷川權

電気毛布にも青空を見せむとす 中原道夫

火に学ぶごとく焚火を囲みけり 木村淳一郎

日向ぼこ日向がいやになりにけり 久保田万太郎

孤独死のきちんと畳んである毛布 北大路翼

遠く行く声や焼いも焼いもと 岸本尚毅

七五三三は祝詞の間に眠る 伊藤伊那男

雪解の雫すれすれに干布団 高濱虚子

焼藪屋柱燃やしてゐたりけり 大石雄鬼

七五三子よりも母の美しく 吉屋信子

翔べよ翔べ老人ホームの干布団 飯島晴子

焼藪を買ひに出る籤引き当てし 山田弘子

泥の上に泥のひろがる蓮根掘 千葉皓史

他所者のきれいな布団干してある 行方克巳

土佐脱藩以後いくつめの焼芋ぞ 高山れおな

湯の町の小学校や冬休 高田風人子

干蒲団子が見し悪夢叩き出す 西宮舞

湯豆腐やいのちのはてのうすあかり 久保田万太郎

雪下ろす勉強部屋はこのあたり 松倉ゆずる

惜しみなく豆を撒きたる後始末 黒川悦子

湯豆腐や死後に褒められようと思ふ 藤田湘子

獣らは齢を知らず寒施行 広渡敏雄

雪兎煙はしめりつつながれ 田中裕明

又例の寄鍋にてもいたすべし 高濱虚子

寒卵割れば双子の目出度さよ 高濱虚子

日溜まりの水となりけり雪兎 安里琉太

ラグビーの多勢遅れて駆けりくる 山口誓子

寒卵地面つくづくつづくなり 阿部完市

雪搔のまばらと見えて総出なり 宮津昭彦

ラグビーボールぶるぶる青空をまはる 正木ゆう子

一汁と一菜と寒卵かな 清水基吉

雪吊の縄のとぐるの解かれだす 馬場龍吉

ラグビー等のたたきあふ肩胸背腹 野崎海宇

凍豆腐とは凍らなくなりしもの 後藤立夫

葬送や雪踏み役の五六人 細川加賀

ラグビーの頬傷ほてる海見ては 寺山修司

世に合はぬ歯車一つぼる市に 有馬朗人

イブノーシンセデスパファリン一葉忌 榎未知子

ラグビー等のそのかち歌のみじかけれ 横山白虹

ひつぱりて動かぬ櫓や引つぱりぬ 高野素十

神の留守預かつてゐる我らかな 大谷弘至

花嫁を見上げて七五三の子よ 大串章

搔き分けるほどの濃き闇鬼やらふ 鷹羽狩行

誤字をもて自筆と断じ翁の忌 三村純也

かくも小さき白足袋ありし七五三 林翔

古枅や追儼の豆にあたたまり 百合山羽公

降誕祭町にふる雪わが家にも 安住敦

行きずりのよそのよき子の七五三 富安風生

山国の闇恐ろしき追儼かな 原石鼎

ナイフなほ聖菓の中に動きをり 山口波津女

揺るるものばかり身につけ七五三 高倉和子

両膝をついて降参追儼鬼 中本真人

刻かけて海を来る闇クリスマス 藤田湘子

母の手で蝶になる帯七五三 増田妙子

もうあかん追儼の豆に歯が立たず 小寺正三

柔かき海の半球クリスマス 三橋敏雄

どこへ隠そうクリスマスプレゼント

硝子戸の中の句会や漱石忌

熊出るといふ立札の新しく

小道具のパンはほんもの聖夜劇

死にたれば人来て大根焚きはじむ

鷹匠のマイクで語る鷹のこと

大きな手に押され踏み出す聖夜劇

漉き紙に草のひとすぢ蕪村の忌

夜ごと来る狸子連れとなりにけり

人の世は火より興れりクリスマス

うつくしき炭火蕪村の忌なりけり

鶴眠るころか蠟燭より泪

眠る子をベッドへはこぶクリスマス

海神に踏んづけられし鮫鱈かな

次の間に手負いの鶴の気配あり

マツチ売る少女の点けし聖樹かも

凍鶴が羽根ひろげたるめでたさよ

鶴啼くやわが身のこゑと思ふまで

聖夜劇終へし天使が母探す

撃たれたる夢に愕く浮寝鳥

草の根の蛇の眠りにとどきけり

降誕祭終りし綺羅を掃きあつめ

狼の毛もて書くべし立志伝

生きながらひとつに氷る海鼠かな

サンタクロース大きな足を脱いでゐる

牡蠣剥くは身ぐるみ剥ぐに似たりけり

憂きことを海月に語る海鼠かな

東京が瞬いてゐるクリスマス

牡蠣すするわが塩味もこれくらゐ

尾頭の心もとなき海鼠かな

チンドン屋のサンタサックス吹きゆけり

明方や城をとりまく鴨の声

海鼠切りもとの形に寄せてある

クリスマスツリーの電気消す係

海に鴨発砲直前かも知れず

海底より寒しや冷蔵庫のなまこ

神父古い信者われ古いクリスマス

また啼いて同じ夜鴨であるらしや

ふはふはのふくるふの子のふかれをり

闇のみが無垢のくらさや降誕祭

鴨流れ次の一羽もまたゆるく

瞠目はふくるふのもの瞠目も

クリスマス「君と結婚していたら」

夜鴨撃掌に煙草火をかばひ待つ

文机の端まで歩く冬の蠅

聖菓剪るゆつくり底に刃が達し

雌狐の尾が雄狐の首を抱く

水鳥の水尾引き捨て、飛びにけり

漱石忌教鞭なる語古りにけり

われ鯨となりて鯨を追ふ月夜

水鳥の争ふ水の上に立ち

神野紗希

瀧井孝作

関口美子

飯屋賢一

下村桃太

本井英

吉田輝

井上弘美

中本真人

青島玄武

岸風三樓

鳥居真里子

鶴岡加苗

市堀玉宗

曾根毅

ふけとしこ

阿波野青畝

鎌和田ゆう子

遠藤若狭男

高橋悦男

桂信子

福永耕二

川奈正和

松尾芭蕉

大石雄鬼

相生垣瓜人

黒柳召波

茅根知子

正木ゆう子

向井去来

杉田菜穂

森川許六

小原啄業

景山荀吉

山口誓子

品川鈴子

猿橋統流子

西村麒麟

亀丸公俊

堀井春一郎

石井とし夫

小澤寛

橋本美代子

米澤吾亦紅

夏井いつき

押野裕

橋本鶏二

松藤夏山

眞鍋呉夫

眞鍋呉夫

伊藤道明



水鳥に朝の灯ひとつづつ消ゆる 山田弘子

オムレツが上手に焼けて落葉かな 草間時彦

生馬の身を大根でうづめけり 川端孝吉

水鳥の水噺る音恐ろしき 吉田林檎

縁に干す蒲団の上の落葉かな 正岡子規

黒土の大根浮かす力かな 三宅やよい

水鳥のしづかに己が身を流す 柴田白葉女

落葉掃く父なきあとの母の日々 深見けん二

大根の輪切りのあつという間かな 小西昭夫

檻の驚寂しくなれば羽搏つかも 石田波郷

落葉籠底の腐つてをりしかな 茨木和生

大根にしみ入るやうに諭しけり 佐藤郁良

寒鴉田畑といふ言葉かな 綾部仁喜

竹箒落葉の寺へ納めけり 野村喜舟

人参は丈をあきらめ色に出づ 藤田湘子

寒鴉己し影の上におりたちぬ 芝不語男

落葉掻きにて水面の落葉寄す 右城書石

葱白く洗ひたてたる寒さかな 松尾芭蕉

寒鯉を雲のごとくに食はず飼ふ 森澄雄

落葉はく箒に拳ふたつかな 清水良郎

夢の世に葱を作りて寂しさよ 永田耕衣

力とは地から飛び立つ寒すずめ 五島高賢

缶コーヒー取出口の落葉かな 金子敦

日の暮れぬうちにと葱を抜いてくる 市堀玉宗

けふの糧に幸足る汝や寒雀 杉田久文

なつかしく日が当たりくる枯木かな 高柳重信

葱をよく買ふ妻のゐて我家なり 宮津昭彦

住ぎ名つけふくらすずめを飼ひたしや 大石悦子

枯菊と言ひ捨てんには情あり 松本たかし

余生なほなすことあらむ冬苺 水原秋櫻子

白鳥といふ一巨花を水に置く 中村草田男

括りたる縄もろともに菊を焚く 斉田仁

日あるうち光り蓄めおけ冬苺 角川源義

千里飛び来て白鳥の争へる 津田清子

火の迫るとき枯草の閑かさよ 橋間石

草々の呼びかはしつつかれてゆく 相生垣瓜人

白鳥おほかた眠り新瀧テレビも了ふ 鈴木榮子

ごみぶくる枯葉の息にくもりけり 清水良郎

まつくろに枯れて何かの実なりけり 高田正子

掃けるが終には掃ず落葉かな 炭太祇

枯蓮をうつす水さへなかりけり 安住敦

冬木の枝しだいに細し終に無し 正木浩一

焚くほどは風がくれたる落葉哉 小林一茶

冬菊のまとふはおのがひかりのみ 水原秋櫻子

力瘤付けて冬木となりにけり 小島健

西ふけば東にたまる落葉かな 与謝蕪村

木の葉ふりやまずいそぐないそぐなよ 加藤歌郎

冬の木に縛られてゐる拡声器 西川火尖

帚あり即ちとつて落葉掃く 高濱虚子

上着きてゐても木の葉のあふれ出す 瀧田智哉

ものごころつきし如くに冬木の芽 柳雪夫

のこりものに福あるみかん一つかな 久保田万太郎

老いて知る菓子の楽しみ石路の花 遠藤梧逸

愛媛いま悩むほどあるみかんかな 岡崎陽市

海へ出て曲る鉄道石路の花 落合水尾

蜜柑むき大人の話聞いてる 西村和子

滝壺の底が真赤や冬もみぢ 日原傳

蜜柑より小さき両手で剥いてをり 抜井諒一

水仙の香やこぼれても雪の上 加賀千代女

死後も日向たのしむ墓か蜜柑山 篠田悌二郎

水仙にたまる師走の埃かな 高井几童

龍の玉深く蔵すといふことを 高濱虚子

水仙や束ねし花のそむきあひ 中村汀女

生きものに眠るあはれや龍の玉 岡本眸

水仙の花のうしろの誓かな 星野立子

山茶花の垣に銀杏の落葉哉 正岡子規

水仙剪る錆びし鉄を花に詫び 桂信子

帰りには左に見える返り花 高梨章

早梅を片言咲きと言ひとむる いのうえかつこ

真青な葉も二三枚返り花 高野素十

寒椿つひに一日の懐手 石田波郷

咲きし日も散る日も知らず返り花 福田夢汀

花の中雪片こほる椿かな 中田剛

帰り花鶴折るうちに折り殺す 赤尾兜子

雪折の竹もうもれし深雪かな 鈴木花養

イエスには復活木には返り花 岩岡中正

返り咲くたんぽぽに茎なかりけり 福神規子

泣きじゃくるやうにさざんか散り敷ける 市堀玉宗

ふと咲けば山茶花の散りはじめかな 平井照敏

山茶花やバイク覆ふと生るる角 高瀬祥子